

「究極の實在」をめぐるG・ラマチャンドランのビジョン

シスター・マイティリ
栗原淑江 訳

聴衆の皆様、そして壇上の皆様、おはようございます。
す。

皆様方は、この会場に入る前に、G・ラマチャンドラン博士の生涯と業績を紹介したパネル展示をごらんになったことと思います。ラマチャンドラン博士は、南インドのケララ州で、信心深い母親と厳格な父親の三男として生まれました。父親は彼をミッシェン・スクールに通わせ、完全な英語と近代的な教育制度のもとで教育しました。

当時、視野を拡大しつつあった彼の前に、二人の傑

出した人物が登場しました。一人は、宗教的指導者であるスワミ・ヴィヴェーカーナンダ、もう一人は、政治的指導者であるマハトマ・ガンジーでした。ガンジーのスピーチに見られる徹底的なリアリズム、勇敢さと無欲さは、宗教的深みと政治的知識をあわせもつものでした。

その時以来、「究極の實在」についての博士のビジョンが花を開き始めたのです。博士の子ども時代については、『ラマチャンドラン博士の物語』という書で読むことができます。

本日の私の責務は、ラマチャンドラン博士が抱いた「究極の存在」をめぐるビジョンを、私の視点から明らかにすることです。

私は、二十八歳の時に、同志であり指導者であるラマチャンドラン博士の運動に参加しました。当時、博士は七十三歳でした。私は、十三歳の頃から、「それを知れば、すべてを知ることができる」ような何かを探し求めていました。探し求めるものを理解するために、私はあらゆる種類の書物を読み、あらゆる実践を行うと試みました。

ある日、私は、ラマチャンドラン博士に次のような質問をしました。「私は、博士がおっしゃる『究極の存在』について、科学的・数学的な見地から学びたいと思います」と。すると博士は、パラマハンサ・ヨガナンダが著した『あるヨギの自叙伝』を手渡してくれ、読むように勧めてくれたのです。私は、その夜のうちにその本を読み終えました。その後、博士は、私について詳細に評価を行った末に、私をヨゴダ・サットサング・ソサエティ・オブ・インディアのメンバーにし

てくれました。

彼は私の精神的な師でした。博士は、私たちが開催するヨゴダの会合に、すべて出席するのがつねでした。しかし、当時の私は、博士が心に抱く「全能」という概念について、質問することは思いつかなかったのです。

私たちがネヤッティンカラに研究所を設立した後、博士は自伝『冒険の生涯』を書き始めました。それを讀んだ私は、博士が十八歳の時に、すべてのものについて問い、当然のことながら「神」の概念についても問うような知的な人間であったことを知り、驚きました。

ビシユババラティ大学での日々が三年目を迎えた頃のことです。博士の指導教授であったC・F・アンドリュース教授が、マウラナ・ムハメッド・アリーに呼び出され、デリーのデイルクシーでガンジーが二十一日間の断食を行うので、その世話をしよう頼まれたのです。ラマチャンドラン博士も、教授の補佐のためにデリーにおもむきました。

若きラマチャンドランは、モティラル・ネルー、ジ

ヤワハルラル・ネルー、ラジャジ、チタランジャンダス、サロジニ・ナイドウ、アリー兄弟、その他多くの指導者を目の当たりにしました。彼はそれまで、実際にマハトマの断食を見たことがありませんでした。

断食の十三日目、ラマチャンドランは、夕べの祈りに参加するためアンドリュース教授に随行しました。部屋の中ではすべての人、すべての物が静まり返っていました。その中で、やせ細った姿のガンジーが、イスラム教、キリスト教、シーク教、ヒンズー教の指導者たちに囲まれていました。完全な静寂の中で祈りが始まり、終わりました。

ラマチャンドランは、批判的で知的な意識のすべてを働かせてその光景を観察し、祈りの声を聞きました。その時、彼の若々しい精神に何か閃光のようなものが入り込みました。それは、彼の内なる世界を照らし、絶えず変化させたのです。

この美しい経験を、彼自身、次のように語っています。

「私は、圧倒されてはいけなと、ひとりごとを言

いました。そして、自分を見失わないように努めました。しかし、祈りが進行しつづけている間にすら、何かが私の内部で波打ち始めました。それは物理的な経験ではなく、まったく精神的な経験でした。

私は、ベッドの上の弱々しい姿の人物を見ていました。そして、カンバスを張った簡易ベッドに横たわっている中心人物の周囲に、尊敬の念をもって頭をたれて、インドの運命にぎる多くの指導者たちを見ました。私の中で、疑問がわき起こりました。『この小柄な人物は、いかにして、インドの政治革命における押しも押されもしないリーダーになることができたのか。また、彼は、いかにして、その革命を非暴力と結びつけるという奇跡を行うことができたのか。そして、いったいこの祈りの人が、いかにして革命のリーダーになることができたのか』と。

カースト、宗教および信条におけるあらゆる区別が、目に見えない神への献身の中で溶け去りました。そのとき、私の心に火がついたのです。」

「神が存在し、人間の良心を支配しているという真

理が、閃光の中で私のもとに現れました。知性によっては神に達することはできないかもしれないし、理性によっても神を知ることはできないかもしれません。しかし、神は、存在したのです。架空の存在が何百万人も人間の心を支え、支配することはできません。神とは、真理と愛が一つに融合したものでした。

ヒンズー教徒とイスラム教徒が良心と平和と相互理解のうちに調和することを願って断食をし、ベッドに横たわっている人物は、この真理と愛の象徴でした。神の精神は、その部屋の中で身近に出現し、部屋の中をたゆまいました。

この人は部屋に神を連れてきたのです。私はそれを中心の中でたしかに感じました。私は自分に言い聞かせました。私はけっして神を見ることはないし、知ることさえないかもしれない。しかし、この象徴的な人物は神の真理を証明しているのだ。私は、この部屋に神を連れてきたこの人についていこう、と。

さらに、ラマチャンドラン博士は書いています。「長年にわたり、私は、何度となく、次のように言っています

を聞いたことがあります。彼はその祈りを非常に高く評価していたのです。

さて、とても楽しい思い出があります。それは、ラマダン（断食）の祭礼でした。ラマチャンドラン博士は、いち早くそれを行うことを決定しました。博士はかつて、イスラム教徒の教師や学生仲間のコミュニティで暮らしていたことがあり、断食に参加し、祈りを捧げたことがあったからです。ムジブ教授はその考えを歓迎しました。一定の期間、断食をし、後に適切な時に断食を止めることは、すばらしい経験でした。ラマチャンドラン博士は祈りに加わりました。そして、サルマティにおける祈りと同じように、恍惚とした忘我の感覚を体験したのです。

博士は、後に、再三再四、このときの経験を思い起こしています。彼は、確信をもって明確に述べています。「外観は異なっていますが、内なる核は同じものでした。唯一の全能な神への献身であり、神にしたがって生きる決意だったのです」と。博士の行動は、モスクの外にいるヒンズー教徒たちの間で物議をかもしま

友人たちを驚かし、喜ばせたものです——もし私がガンジーを知らなければ、一生涯、無神論者でありつづけていただろうと。私は、この「神の人」が、同時に偉大な政治的・社会的革命の揺るぎない勇敢なリーダーになりうることを理解した瞬間、無神論者であることをやめたのです」と。そして、博士は、死の瞬間まで、この誓いを全力で守ったのです。

自伝の中でラマチャンドラン博士が語っている二番目の「神の体験」は、イスラム教のモスクにおけるものでした。博士について書かれた書の該当部分を引用してみましよう。

「通常、イスラム教は、人々に強要されたといわれてきました。しかし、ラマチャンドラン博士は、それとは反対に、イスラム教が、一般の人々に神の平等・自由というメッセージを伝えることによって、人々の解放に強い影響力をもつことを見出したのです。博士はよく、イスラム教の祈りを唱えていました。私は、博士がまさに善良なイスラム教徒として、『慈悲あまねく慈愛深きアッラーの御名において』と唱えるの

したが、彼はそれについて思い悩むことはありませんでした。彼の心の中にはシャンティニケタンやサルマティの伝統があったので、自分が正しいことを行っていると確信していたのです。ラマダンという宗教行事を共有することができて、彼は大きな幸福感に満たされました。

博士はまた、S・K・ジョーシらと共にコッタヤムとナガルコイルのミッションスクールで学んでいたときにも、同じように「キリスト教のダルマ」における至福の体験を享受しました。

さて、幼年期の博士は、最愛の母親が入念に礼拝している間は、つねにそれに付き添っていたといいます。当時は、全能なるものについてはまったく考えず、母親の礼拝について考えていただけでした。

その後、十歳か十一歳のとき、マハー・アヴァター・ババジを思わせる若いヒンズー僧に呼ばれ、胃痛を治すのに役立つと、プラナヤマ（ヨガの呼吸法）の実践を教わりました。実際、彼がシャンティニケタンで胃痛をわずらったとき、その実践によって奇跡的に治

することができました。かわいそうな少年は、自らの決意と意志で実家から遠く離れたシャンティニケタンに住んでいたのに、病気になるに際して、昔のことを思い起こし、ヒンズー僧の言葉を思い出したのです。刑務所に入っていた時期に胃痛におそわれた際にも、独得のプラナヤマの実践によって回復しました。これは、夕方、屋外で一、二時間、座っているときに、博士が私に語った話です。

このように、若きラマチャンドラン博士の心の中で、神への信念がゆつくりとまた着実に花を開き始めました。九十年にわたる生涯の中で、神に対する彼の信念は、試みられ、鋭さを増し、磨かれ、形を与えられました。それがラマチャンドラン博士における「究極の實在」のビジョンだったのです。

ラマチャンドラン博士は次のような人物です。

国民に奉仕するために貴族としての生活を拒絶した人。

独立闘争の中でガンジーの運動に加わった人。

独立闘争の期間、七年間に十一回も投獄された人。

ラマチャンドラン博士は、自らを諸宗教の名称や形式と一体化させることには興味を持っていませんでした。博士が求めたのは、究極的な真理だったのです。博士は述べています。「いかなる特別な宗教的信念も公言する必要はありません。重要なことは『究極の實在』といかに触れ合うかなのです」と。

そして、次のように述べています。「『神』というのは、もつともよく知られている言葉です。しかし、その重要性を知っている人はほとんどいません。たとえば聖典に、神は心と感覚の理解を超えるものと記されていたとしても、人々の内なる直観によって神を認識することは可能なのです」。ラマチャンドラン博士は、私たちが、すべての感覚の力を開発するのと同様に、第六感を開発するよう望みます。直観は、魂がそなえる、すべてを知ることのできる能力なのです。直観とは、物理的な五感が把握できない真理を理解することのできる第六感のことです。

私マイティリは、博士の書物を読み、そのスピーチをきき、個人的に対話することによって、彼が「究

その冒険の中で、一度ならず死にかけた人。

その人生において、失敗を勇敢に受け入れ、その代償を払う覚悟のあった人。

禿頭の中に膨大な知恵と知識を蓄積した人。

人生の炎の中で黄金のように陶冶された人。

多くの経験をするために冒険の人生を送った人。

そのような人物が、古代インドのヒンズー教における偉大な聖人および賢人のごとく出現したのです。

彼は、全能の至福について思索し、それを何度も経験したにちがいありません。また、最終段階では、ほとんどすべての時間を、至福の状態であるサット・チット・アーナンダ（實在・睿智・歡喜）に没入していました。私たちは、手を組んで椅子に座っている博士に、よくたずねたものでした。「博士、何をしていますのか」と。すると博士は、子どもっぽく微笑んで答えました。「わが子たちよ、神に話しかけているのだよ」と。

さて、本日のテーマである「究極の實在」に話を戻しましょう。

極の實在」についてどのように考えていたかを、次のように理解しています。すなわち、神についての通常概念は、神は超人的で、無限で、遍在し、全知であるということですが。しかし、このような一般的な概念の中にはバリエーションがあります。私たちがどのような神の概念を抱いているようにも、それが私たちの日々の行動に影響を及ぼさない場合や、日常生活がそれからインスピレーションを受けない場合、また、それが普遍的に必要なことが見出されない場合には、その概念は何の役にも立ちません。

私たちが欲求を充足する上で——たとえば、人々と関わりとか、お金を稼ぐとか、本を読むとか、試験に合格するとか、また最も高尚な義務あるいは取るに足らないような義務を遂行するとか——、それが不可欠であると考えられない場合には、明らかに私たちはそれとの結びつきを感じていないのです。神は無限かもしれないし、遍在するかもしれませんが。全知かもしれないし、人間的なものかもしれませんが。また慈悲深い存在かもしれませんが。しかしこれらの概念は、私たち

に神を知ろうと思わせるには不十分なのです。私たちは、これらの概念を、多様な生活の中で直ちに実的に用いることはないのです。

私たちは、さまざまな聖典に記されている神について読みます。また、宗教者や聖人の説教の中で神の壮大な存在について聞き、神への賞賛を耳にします。さらに、自然界の美のベールの背後に神の力を想像します。私たちは、これらの窓を通して神に出会おうとするのです。

しかし、これらすべての窓には検証されておらず、吟味されていないデータから取り出された不確かな推論という、不透明なガラスが張られているのです。有限な知性によって神についての完全な、あるいは直接的な知識を得ることはできません。知性は、ものごとの部分的で間接的な見識しか与えないのです。ものごとを知的に見るということは、そのものから離れて見ることです。直観によって、神という存在を悟ることができます。ラマチャンドラン博士は、そのことを次のように述べています。「神が至福です。神はつねに、

わくわくさせるような喜びを増加させます」と。

さらに、ラマチャンドラン博士はつづけます。「神は、顕在的なすべてのものがそこから創造され、生まれ、調和して発展するような、見えない知性を生み出す場です。なぜ季節は時間をたがえずにめぐってくるのでしょうか。なぜ私たちは、空腹を感じ、また空腹を満たすための食物を持つのでしょうか。宇宙に知性的存在がなかったならば、私たちは空腹になっても、食物を持たないかもしれません。

宇宙には、災いをなすような多くの戯れや狂いがあるにもかかわらず、つねに全体にわたるリズムが脈動しているように思われます。また、あらゆるものはすべてを統治する知性的存在の場から生み出されるのです。したがって、『究極の実在』とは、すべてを統治する最高の知性的存在なのです」と。

ラマチャンドラン博士は、つねづね、自然界に存在するエネルギー概念を称えていました。もし事物が破壊されても、それらは別の方法で花を咲かせます。博士は、このエネルギーがどこから来るのかと、よく驚

きをもって問うていました。そして、あらゆるものからわき出る宇宙のエネルギーについて説明するのがつねでした。このように、博士にとって「究極の実在」はエネルギーの宝庫であり、大宇宙のエネルギーなのです。

博士は、このように全能という概念について（傍点を付けた）三つの文章で説明した後に、「神は自らのイメージの中で人間を創造した」という真理について説明します。この問題について考察する際、博士は、「これは、物理的な身体について言っているのではない」と述べています。喜び、生得の知性、そしてエネルギー——これらすべてが、あらゆる人間の中に存在します。神が自らのイメージの中で人間を創造したというのは、このような意味においてなのです。

かつて私は、物質的な所有物やそれへの執着について、ラマチャンドラン博士に質問したことがあります。博士は、『ヤジュルヴェーダ』の文を引用して答えてくれました。その意味は、この世では子どもが公園で遊ぶのと同じように、すべてを受け入れることである。

子どもは楽しむために公園を利用するが、同時に、子どもは、帰るべき家があることを知っている、というものです。

「悲嘆や苦痛の原因は、所有物への執着であり、所有物それ自体ではありません。私たちは、この世では何も所有しません。別の人々は、使用する以上のものを所有している場合もあります。しかし、死ぬときには、百万長者も貧者もすべての所有物を残していかなければならないことを忘れてはなりません。

一方、神だけを考えるような一面的な生き方をするあまり、この世における義務をおこたってはなりません。神に傾注しながらも、ある部分では神に与えられた任務の徹底的遂行に傾注してください」と。

また博士は、差別を重大な問題ととらえること、よい習慣を涵養し、悪い習慣を抑制すること、日々の生活に関することなど、私たちに明確な基本原則を示してくれました。彼の書を読めば、それらをめぐる知識を集めることができます。「究極の実在」についての知識を得るために必要な条件として、博士は、「あらゆる

ものを愛して、いれば、あなたは宇宙的な意識を持つでしょう」と述べています。

ラマチャンドラン博士は、一日として祈りを欠かしたことはありませんでした。博士は、再三再四、私たちに助言してくれました。「祈りは、祈られなければなりません」と、彼は言いました。「すべての力はあなたの内にあるのだから、祈りによってあなたは自らの内なる力をノックしているのです」と。博士はまた、集団で祈ることをすすめました。使用人のメイドが祈りに加わるのを待ったことすらありました。祈りに対する彼の信念は、理解を越えるものでした。

博士自身の祈りは、一風変わった、しかし魅惑的なものでした。博士は、あたかも愛する人に話しかけるように、神に話しかけたのです。「最愛の、全能なる宇宙の統治者、慈悲深い愛の体現者、あなたの慈悲によってのみ、私たちは生きます。私たちに祝福を。そして、私たちを護ってください」と。博士が他界した時刻は、この祈りを終えた後の早朝、六時五分でした。満月の日でした。

「ほとんどの人がそれを欠いているのです。私たちの道徳的勇敢さは、時として不十分で、私たちはそれが欠けていることを恐れるようになります。唯一の治療法は、神への祈りなのです。祈りは機械的なプロセスではありません。祈りが精神の深みからなされた場合、それは、道徳的勇敢さをもたらすのです。あなたには十分な基本的な道徳的勇敢さがそなわっています。祈りと瞑想を、意識的に行ってみなさい」と。

また、ラマチャンドラン博士は、芯まで勇敢で恐れなき人でした。博士は、私たちに、自由で、率直で、勇敢でいてほしいと願っていました。よくガンジールのメッセージを引用していました。「大胆さは精神性の第一要件である。臆病者は道徳を持つことができない」と。私たちが恐れるのは「恐れ」のみです。恐れを克服せよ、怒りを克服せよ——これが、ラマチャンドラン博士が繰り返し唱えたマントラでした。

一方、博士は、儀式が好きではありませんでした。宗教から儀式を差し引いたものが精神性であると、博士はつねづね語っていました。人々は、儀式以上のもの

博士は、盲目的な信仰者ではありませんでした。もしその概念が明確でなければ、彼は行動しなかったことでしょう。彼はつねに、すべての人が神の理性と知性を用いてほしいと願っていました。

博士が行った人類に対する貢献、特に女性と子どもに対する貢献は、博士に平和と幸福感を与えました。博士は、祈るために寺院に行くことはありませんでした。しかし、私たちを励ますために、クリシュナの誕生日を祝う日にクリシュナ寺院に一緒に行ってくれたこともありました。

博士は私たちに特別の助言を示してくれました。すなわち、法には三つのタイプがある。一、人間が作った法、二、社会の法、三、神の法です。彼はよく言っていました。社会の法を守るために、人間が作った法を破ることはできるし、神の法を守るために、社会の法を破ることもできる、と。

時折、私が、組織を運営する闘争の中で不可欠な道徳的勇敢さを欠いていると感じたとき、博士はよく次のように慰めてくれました。

のに心を高めるべきなのです。儀式は、最初の段階で自分自身を浄化するためのもので、儀式にのみ没頭したり、神を忘れたりするためのものではないのです。博士は、ヒンズー教の偶像崇拜もその一つであると説明しています。それは、偶像を超えて、それ自体が理想となってしまうのです。

私は、ラマチャンドラン博士を、古代インドの偉大なりシ（聖賢）のような人であると考えます。そのリシは、自らを心の平静を保った人と称しました。私は、「究極の実在」についての正しいビジョンを持ったために、博士の生涯は完全なものになったと感じています。最後に、「究極の実在」についての博士のビジョンの核心を示しましょう。

「それは、最高の至福であり、宇宙のエネルギーの宝庫であり、宇宙のすべてのものを統治する最高の知能なのである」と。

(シスター・マイティリ／
ラマチャンドラン民衆福祉財団議長)
(訳・くりはら としえ／東洋哲学研究所主任研究員)